

## 日本語の逆接接続助詞で終わる言いさし文の談話機能：対応する中国語表現との対照を中心に

何，潔

<https://hdl.handle.net/2324/6787690>

---

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術），課程博士  
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 何 潔

論 文 名 : 日本語の逆接接続助詞で終わる言いさし文の談話機能  
— 対応する中国語表現との対照を中心に —

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

日本語の自然談話では、「文を最後まで言わずに接続助詞で言いさしているもの」が頻繁に観察される。このように従属節のみで終結している文は言いさし文と呼ばれる。白川(2009)をはじめとする日本語の言いさし文を扱った研究は、その分類と機能の記述に終始しており、それぞれの機能を統一的に説明しようとする理論的なアプローチはほとんど見られない。また、中国語では語順の関係で日本語のように接続助詞が従属節末に置かれることはないため、中国語には言いさし文は存在しないという記述が見られる。しかし、実例を観察したところ、従属節のみで用いられる文が中国語にも見られたため、中国語には言いさし文が存在しないという見解は必ずしも妥当ではなく、検討の余地があると考えられる。

こうした先行研究の問題点を解決するため、本研究では関連性理論を分析的枠組みとして採用し、聞き手がどのように言いさし文の理解に到達しているのかという観点から、日本語の言いさし文の談話機能を統一的に説明した。同時に、日本語と中国語の言いさし文について分析し、その類似点と相違点について分析を行った。さらに、日本語の接続助詞で終わる言いさし文に機能的に対応する中国語表現、とりわけ接続助詞「けど」「のに」と副詞“倒（是）”、“明明”との間にどのような関連性があるのかを解明した。

論文は以下の8章からなる。

第1章では、研究背景、研究目的及び論文全体の構成について述べる。

第2章では、本研究の枠組みとして用いた関連性理論について説明した。

第3章では、言いさし文に関する先行研究を概観し、本研究が解決すべき具体的な課題を提示した。

第4章では、本研究で使用される資料及び自然談話コーパスのデータ文字化の原則について説明し、分析方法を述べた。

第5章から第7章までが本論である。第5章では、日本語の言いさし文と中国語の言いさし文の類型について分析し、その類似点と相違点について考察した。具体的には、関連性理論の観点から、言いさし文に含意された発話意図を、聞き手がどのような推論過程を辿って解釈するかについて分析した。その上で、日本語と中国語の言いさし文の類型をそれぞれ体系立てて提示し、両言語の類

似点と相違点について分析した。

第 6 章では、接続助詞で終わる言いさし文の談話機能について分析した。具体的には、関連性理論の「手続き的意味(Blakemore1987,2002)」という概念を用いて、聞き手が発話解釈を行う際に、言いさし文の文末に現れる「けど」または「のに」が、聞き手の推論プロセスにどのような制約を課すのかについて分析した。

第 7 章では、日中対照研究の観点から、日本語の言いさし文における接続助詞と機能的に対応する中国語表現を明らかにした。「けど」節言いさし文または「のに」節言いさし文の談話機能を明確にした上で、言いさしの「けど」及び言いさしの「のに」と機能的に対応する中国語の言語形式を抽出し、その対応関係を明らかにした。とりわけ、言いさしの「けど」と副詞“倒（是）”、言いさしの「のに」と副詞“明明”との間にどのような関連性があるのかを解明した。

終章の第 8 章では、本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べた。

本研究の意義は、関連性理論の観点から、日中両言語の言いさし文の談話機能を明確にした後、両言語を対照させることにより、日本語の言いさし文と中国語表現との対応関係を明らかにした点にある。本研究の成果は、中国人日本語学習者にとって最も困難とされる日本語言いさし文の理解の向上に資すると考えられる。